

## 定期巡回・随時対応型訪問介護看護 ケース紹介

<b>事例</b>	87 歳	女性	要介護3
<b>身体状況</b>	<b>生活状況</b>	<b>医療ニーズ</b>	
杖歩行だったが1か月程入院していた間に歩行状態低下、膝折れ、転倒みられ、外傷も起こしている。歩行器もレンタル使用。	集合住宅娘様と2人暮らし。娘様平日就労にて日中独居。食事は娘が用意。自宅トイレ利用通所利用あり。	退院時、転倒繰り返していたことによる外傷の処置が必要な状況。特指示利用していた。	
<b>導入の経緯</b>			
約1か月間の入院を経て退院となるも、歩行状態落ちてしまっており、膝折れ、転倒を病室で繰り返し、皮下出血や表皮剥離を作ってしまった状態。歩行は軽介助必要であったが退院後自宅にて日中独居となってしまうため、緊急時の連絡を行う仕組みづくりと日中の見守りをお願いしたい。			
<b>本人・家族の生活への意向</b>	本人様：今は思うように歩けないが、退院して家の環境に慣れれば、また体力もつけば一人で生活しても大丈夫になると思う。 娘様：本人は自身の力で頑張りたいと話しているが、自分が仕事の間心配なので生活を見守ってほしい。		
<b>看護サービス</b>	<b>看護助言</b>		
退院後2週間特別指示書が交付されており、1日1回訪問を行い外傷処置。	通所介護も利用されており、体力の増進に伴いADL向上していく中で、自身も自宅生活に自信を持てるのではないかと。		

### 支援経過

<p>8月1日 担当者会議・契約。見守りケータイを本人に貸与、使用方法の確認を行う。娘様は8時30分～17時まで就労のため外出している。朝食は娘様とともに8時30分以前に摂取されるため、弊社訪問は昼(11時頃)、夕(16時頃)の1日2回となった。週3回デイサービス利用。サービス内容は娘様が準備している昼食の配膳と、昼食後薬の介助。またトイレ促し排泄見守り。夕方は安否確認と排泄の声掛けとなった。</p> <p>8月1日～8月10日 3日に転倒するも自身で起き上がったと後日本人様より報告あり。表皮剥離増えていた。午前中は臥床している場合が多い。サービス開始当初はトイレの声掛け誘導を行っていたが、一週間を過ぎた頃より訪問時「もうトイレ行きましたよ」とおっしゃりサービス中トイレ誘導を行わなくなっていった。</p> <p>8月10日～31日 16日娘様より「歩行が安定したようで、訪問回数を1日1回に減らしてもよいかも。」との話あり。本人様からも訪問時「自分で食事を出して食べるから平気ですよ。」という言葉が聞かれるようになる。</p> <p>9月1日 夜間随時訪問へサービス再契約を行う。24時間通報対応加算利用し、日中の緊急時に対応していく方針となった。</p>
---

<b>導入後の効果</b>
退院直後は歩行状態安定せず不安の言葉も本人より聞かれていた。しかし、定期的に様子を見に来るヘルパーと、何かあった際に連絡の取れる見守りケータイがある環境の中で、徐々に自宅環境に慣れ、自信を持たれていき、ついにはヘルパーの訪問がなくても本人様も家を空ける娘様も安心できる状態まで回復を行うことができた。もしもの時の安心感を得るための支援を実施することができたことと評価できる。

<b>今後のケアの方向性</b>
本人様の意欲に沿った形でデイサービスや自宅環境の整備を実施していく。その中で弊社は自宅で転倒など危機に見舞われた際に訪問し駆けつける役割を今後担っていき、見守りケータイの操作方法の理解など定期的にモニタリングを行っていきながら、生活の見守りを行っていく。